

トピックス

世界は9条を えらびはじめた

川崎 哲[※]



ブッシュ政権を批判する元米陸軍大佐アン・ライト
(写真提供：日本機関誌協会埼玉県本部)

9条世界会議

去る5月4～6日、千葉（幕張メッセ）、仙台、大阪、広島のカ所所で「9条世界会議」が開催された。戦争放棄と軍隊の不保持を定めた日本国憲法9条を現代の世界にいかすために開かれた史上初の国際会議だ。

ノーベル平和賞受賞者が基調講演をし、国連からメッセージが寄せられ、世界5大陸から非武装の平和活動が報告された。豪華アーティストのライブ、紛争、アジア、米軍、核、環境などをテーマに数十のシンポジウムや自主企画が行われ、100を超えるブースが所狭しと並べられ、会場は熱気に包まれた。

幕張メッセには3日間でのべ2万人以上、全国計でのべ3万人以上が参加した。主催者の予想をはるかに上回る来場のため、幕張の初日は3000人が会場に入れない事態となり、急きょ外の広場で集会を開いた。参加国・地域数は42にのぼり、海外参加者数は約200名であった。数百人のボランティアが会議を支えた。

ハーグ、GPPAC、グローバル9条キャンペーン

9年前の1999年、オランダのハーグ平和会議は「各国議会は日本の9条のような戦争放棄を決議すべきだ」と宣言した。冷戦が終結し環境や地雷問題でNGOが台頭した20世紀末期に、9条の理念は、21世紀の平和の基調をなすものとして期待されていたのだ。

だが今世紀に入ると、9.11やイラク戦争にみられるように、世界は新たな戦争と軍事化の時代に突入した。2001年から世界の軍事費は右肩上がりとなり、2007年には1兆2000億ドルを超え、今や冷戦末期以上の水準である。

国連では、武力紛争の予防に力を入れよとの声が高まり、2001年の国連事務総長報告を受けて世界

的NGOネットワーク「武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ（GPPAC）」が発足した。市民社会と国連・政府が協力し、紛争への「対処」から「予防」への転換が始まったのである。ピースボートがGPPAC東北アジア地域事務局を担った。

GPPACでは、日本の9条が脚光を浴びた。9条は「アジア太平洋の集団安全保障の土台」として機能してきたのであり、今後アジアや世界の平和メカニズムとして活用されるべきである。2005年のGPPAC国連会議はこう提言した。

これを機に、9条を世界に広めようという「グローバル9条キャンペーン」が開始され、世界的な意見広告運動やシンポジウムが各国で行われた。2006年のバンクーバー「世界平和フォーラム」では「各国は日本の9条のように憲法で戦争を放棄せよ」と最終文書がうたった。こうした機運のなか「9条世界会議」を日本で開催しようとの構想が生まれた。

事前準備を経て2007年1月に「9条世界会議」日本実行委員会が発足した。国内各層リーダー88人の呼びかけ人のもと、幅広い団体や個人が集まった。池田香代子（翻訳家）、新倉修（日本国際法律家協会会長）、吉岡達也（ピースボート共同代表）の3名が共同代表をつとめた。

武力によらない平和

9条世界会議は、当初から2つのことにこだわった。第一点は、日本の憲法論議を国内の法律・政治論争に閉じこめず、世界のなかでの意義を再発見しようということだ。第二点は、従来の憲法集会に足を運ばなかった若者たちにも届くような舞台をつくらうということだ。国民投票法が成立し憲法改定問題は目の前にある。自衛隊のイラク派兵など喫緊の政治課題も多い。しかし、目の前の国内政治問題だけにフォーカスするのではなく、「世界から9条を見つめ直す」というアプローチをあえてとることで、

※ かわさき・あきら。ピースボート共同代表、「9条世界会議」日本実行委員会事務局長。

憲法論争に新しい風を吹かせたいと考えた。

第一点は、「武力によらずに平和をつくる」ことが最大のテーマだった。基調講演者の1人北アイルランドのノーベル平和賞受賞者マイレッド・マグワイアは、30年にわたる北アイルランド紛争の経験をもとに「対話と非暴力による紛争の解決」を訴え、9条はそのモデルだと述べた。もう1人の講演者1999年ハーグ平和会議の代表コーラ・ワイスは、9条を守る運動は戦争の廃絶へ向けた世界的努力の一部であり「皆さんは独りではありません」と語った。2人ともイラク戦争に象徴される世界の暴力的無秩序のなかで、9条を「世界の希望」とみていた。

元米陸軍大佐アン・ライトは、外交でなく軍事に傾注するブッシュ政権を批判し、日本がこのような路線に追随するなら国民は抵抗すべきだと訴えた。元米兵のエイダン・デルガドは、イラクのアブグレイブ刑務所の虐待を告発し、良心的兵役拒否をした。元イラク兵のカーシム・トゥルキは、戦争の破壊のなかで人道復興活動の道を選び「非武装の支援が一番」と結論づけた。エイダンとカーシムが肩を並べる姿は、多くの人の感動を呼んだ。

作家の雨宮処凛は、アメリカのワーキングプア層がイラク戦争に動員されている現実を指摘し、それが日本の貧困と重なることに警鐘を鳴らした。イラク支援ボランティアの高遠菜穂子は人質事件をふりかえり「日本が9条を突破した(派兵)ことで私は命を狙われ、9条を実行した(非武装支援)ことで私は命を救われた」と語った。

戦争の廃絶への道筋

西アフリカの平和構築活動者エマニュエル・ボンバンデ(ガーナ)が「紛争と貧困に苦しむアフリカにこそ9条を導入したい」と述べ、軍隊をなくした国・コスタリカのカルロス・バルガスは「日本やコスタリカの平和憲法の原則は世界的に実現可能だ」と語った。米GHQ翻訳家として憲法の男女平等条項を起草したベアテ・シロタ・ゴードンは「日本国憲法は人権のための英知の結晶であり、押しつけてはならない」と述べ、韓国の人権弁護士イ・ソクテは「日本が9条を失うことは世界にとっての損失」と訴えた。

分科会では6つのシンポジウムが開かれ、(1)紛争への非暴力的アプローチを主流化すること、(2)米軍基地の強化を食い止め、アジアに平和メカニズムを築くこと、(3)平和を創る女性パワーを強化し、

平和活動への女性の参画を普遍化すること、(4)環境と平和をつなぎ、戦争をつくり出す経済から脱却すること、(5)核兵器を廃絶し、21世紀を脱・核時代にする、(6)日本社会が平和憲法の価値を再認識し、9条の危機を乗り越えること、が話し合われた。また「GPPACフォーラム」や「国際法律家パネル」で今後の国際活動の方針が討議されたほか、グローバリゼーションと軍事化に関する討論や、良心的兵役拒否と軍隊をなくす運動の経験交流などが行われた。

日本社会の「9条の底力」

第二点目のこだわりであった若者らの参加に関しても、9条世界会議は大きな成功をおさめた。初日夜の音楽ライブ「9ALIVE」にはUA、FUNKIST、原田真二、加藤登紀子が出演し、大きな盛り上がりを見せた。音楽を楽しみたいという気持ちと、戦争や平和についてしっかりと考えたいという思いが、参加者のなかで重なり合い融合をみせたことが、満員御礼の動因となった。筆者は準備過程のなかでこれ以外にも数多くのアーティストと折衝をしたが、9条や平和の問題に関心をもっている日本のアーティストは決して少なくないと感じた。

また、2月に広島を出発し幕張まで歩いた「9条ピースウォーク」や、平和のうた「ねがい」の大合唱、市民と弁護士がうたう「ベートーベン交響曲第九番」など、数百人、数千人が手作りで参加する企画があった。世界会議の財政が、草の根の賛同金や支援金によってつくられたことも特筆すべきである。

日本の市民社会がもつ「9条の底力」が大規模に発揮されたのであって、今後の運動の広がりには大きな可能性を示した。

今後へ向けて

9条世界会議は、日本国内においても世界規模においても、平和運動の新しい扉を開いた。国内では8月に「9条世界会議のDVD」が発売、9月には書籍『9条世界会議の記録』(大月書店)が発売になる。これらの成果を1人でも多くの人に知ってほしい(詳しくは<http://whynot9.jp> 03-3363-7967)。

国際的には、海外参加者らとの連携を強化して「グローバル9条キャンペーン」(www.article-9.org)をさらに活性化させたい。キーワードは、「紛争の予防」「資源を軍事から人間へ」「平和に生きる権利」である。